ＳＤＧｓのカギは環境保全型農業推進に

ＳＤＧｓ（＝「持続可能な開発目標」）が新聞等でしばしば登場する。国連が推進するもので、「貧困のない、持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことを目指し」、一七の目標、一六九のターゲット、二三〇の指標が設けられている。この背景にあるのが、人類は地球が再生可能な資源量の一・五倍を使っており、「私たちは次世代に地球を引き継げるのか」という危機感だ。こうした危機感が浸透しているとはいいがたい現状にあるが、ゲーム等を使って考え方や手法等を学習する企業や団体等の取組みが報じられている▼こうした折、昨年秋に出版されながら目を通せずにいたＤ・モントゴメリー著『土・牛・微生物』（築地書館）を読んでみた。著者は先に『土の文明史』を出しており、古代文明から現代までの歴史を通観して「土が文明の寿命を決定する」ことを明らかにしている。『土・牛・微生物』は、先著の結論を踏まえて「文明の衰退を食い止める土の話」をまとめたものだ。著者が最も懸念しているのが、土壌の流亡・喪失であり、現状のままだと二、三〇〇年のうちには表土のほとんどが失われる計算になるとする。そこで提起しているのが環境保全型農業（日本でいうそれとは異なり、①最低限の土壌攪乱、②被覆作物取り入れ、③多様な輪作、の三原則に従った農法）への取組推進で、特に不耕起栽培の必要性を強調する▼著者の基本にある哲学は「土の健康」であり、環境保全型農業が最も持続的であると同時に、経済効率も高いとする。持続性を考えていくにあたって見過ごすことの許されないきわめて重要な論点を提示している。

（土着菌）